

第70回 宗会 一般質問 (2021/6/24)

旦保 立子

人は弱いから群れるのではない。

群れるから弱くなるのだ。寺山 修司

1994年、宗務審議会「女性の宗門活動に関する委員会」が立ち上げられ、14回の審議によって、96年1月答申が出され、同年5月『真宗』誌に掲載されました。同答申は宗門の機構、制度、教学的課題など多岐細部にわたり、4半世紀を経た今も褪せることなく、男女両性で形づくる教団を目指す私たちに大切な課題提起をしています。改めて、この答申をたたき台に男女平等参画推進の方途を見出す委員会の立ち上げを要望いたします。お考えをお聞かせください。

さらに、同答申提出の同年12月、宗門に「女性室」が開設されました。それから25年、女性室は広報誌「あいあう」発行、教区出向等を通して寺に住まいする女性たち男性たちが自らのあり方について、歴史と同時に現代の問題も含め、考えるようになったといえます。そこでです。今般の総長演説の中に「女性室」の文言が見えず、また、今常会の目玉とされている行財政改革内局案の宗務機構試案にも女

性室の存在がありません。当派における「女性室」の存在は、男性主導の色濃い仏教界において、宗派全体の歩むべき方向性を内外に示すものとして誇らしく思うことです。女たちが現実社会の中でその生き様に疑問を持ち、問題意識を共有、考察、発信することは、まさに宗門における男女平等参画による同朋会運動の表現であると思います。それを可能とならしめたのが女性室の存在であります。その女性室を宗門機構の中でどのような位置づけとされていくのかお尋ねいたします。また、その任を担う女性室非常勤スタッフの雇用期間満了者の更新・更新しないは誰がどういう内容の理由で判断・決定されていくのでしょうか。もし、更新しない場合、その補充人員の確保は速やかにできているのでしょうか。お尋ねいたします。

『真宗』誌4月号「樹心佛地」において、日本のジェンダーギャップ指数、特に政治分野での参画度は低迷を続けているとの文章中に「女性の参画を積極的に進めようと意識している人が少ないことの表れです」と指摘されました。宗門もしかりです。さらなる女性参画の積極的意識が試される時です。組門徒会における女性参画率は時限立法とはいえ「特別措置条例」施行によって増加したのは確かです。

その意味において、寺に住まいする女性についても、組会に、教区会に宗会に参画する方途を探るべきと思いますが、お考えをお聞かせください。

次に、2018年12月から19年2月にかけて「経典の中で語られた差別」企画展が参拝接待所ギャラリーにおいて開催され、その中での「経典に表された女性差別」ではその核心を突く3枚のパネルが開催間際に外され、差し替えられたことは周知のことです。その後、当局はこの問題を「宗門内に広く共有していく」「梅陀羅の問題同様に同じ根から出ている、重く受け止めていく」「教団として教学・教化の課題として継続した研究を進めていきたい」との回答をされました。「是梅陀羅」問題は積極的にその考えを表明しようとされています。しかし、このパネル差し替えにおける問題についてはその後何らの方向性も見えません。今まで、どのような歩みをされ、宗門内に広く課題共有されているのかをお聞かせください。

最後に、元オリンピック・パラリンピック組織委員会会長・真宗門徒・森喜朗さんの差別発言(女性は優れているが競争意識が強い。発言時間が長い。みんなわきまえておられる)を聞いて、私は総長に手

紙を書かせていただきました。この森発言は全推協叢書「同朋社会の
顕現」の差別事件と同じ質のものであること、宗門としての声明を出
してほしいことを伝えました。しかし、今に至るまでなしのつぶてで
す。アクションを起こすほどのことではないという判断なのでしょう
うか。その見解をお聞かせください。

御影堂から見真額を下ろしての法要執行のこなわなかった先の宗
祖 750 回御遠忌を思う時、23 年の慶讃法要には是非、親鸞聖人の頭
上から見真額を下ろして勤まりますことを願ってやみません。

自分一人でも歩かねばならない——むしろ自分、ひとりでこそ。

寺山修司

質問を終わります。